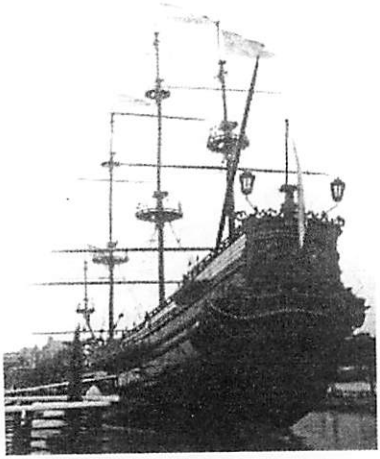
論説

橋本進氏の論稿
デ・リーフデ号、豊後に到着す
―ウイリアム・アダムス（三浦按針）の航海―

紹介者　佐藤　巧

平成二十七年四月、橋本進氏から佐伯史談会へ日本旅客船協会誌『旅客船』に掲載された論稿が送られてきた。


長崎オランダ村のリーフデ号

橋本進氏は昭和三年香川県に生まれ、高等商船学校航海科を卒業して航海訓練所に勤務した。後に練習船大成丸や日本丸の船長等を歴任して東京商船大学の教授となった。著書に『咸臨丸還る―蒸気方・小杉雅之進の軌跡』や『咸臨丸大海をゆく―サンフランシスコ航海の真相』などがある。現在八十七才。

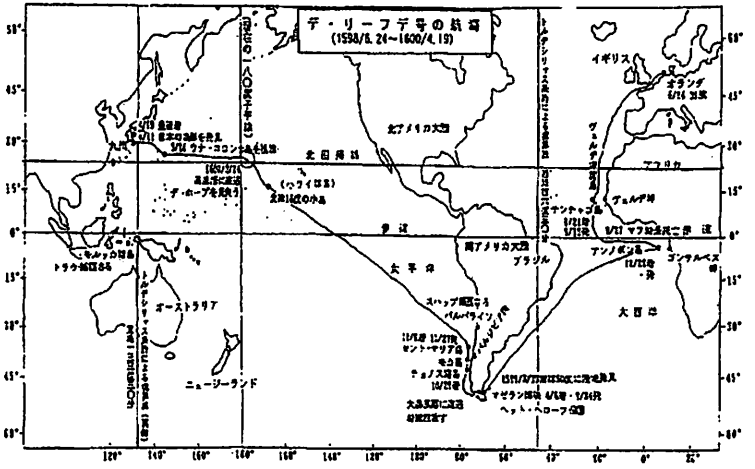
我々がリーフデ号の漂流実験を行った平成二年当時、既に橋本氏の「到着説」は聞き及んでいたが、その後、平成十四年二月、直接本人が佐伯へ来訪された。事前に全日本船舶職員協会誌『全船協技報』に発表さ

れた「デ・リーフデ号の航海」前後編が郵送で届いた。

橋本進氏は帆船航海を熟知した立場で、歴史上の航海を書き残したいと、リーフデ号の航海についても調査研究されてきたのである。その専門的で理路整然とした論説に異論を挟む余地はなく、ただただ海の男の情熱を受け止めるのが精一杯だった。

今回、郵送いただいた『デ・リーフデ号、豊後に到着す』のタイトルについて、「そもそも航海とは、人や貨物を出発港から目的港まで安全、確実に運送することをいう。つまり、目的を持って航行するのが航海であり、破船その他の理由で航行能力を喪失し、あてもなくさまようのは漂流である。ところがデ・リーフデ号は南太平洋岸のセント・マリア島沖に停泊中、僚船のデ・ホープ号と合議し、ともに日本の豊後へ向けて航行することを決め、その目的にそって進路を西北西にとっている。あきらかに豊後を目指しての航海であった。だからデ・リーフデ号は豊後に到着したのであって、漂着ではない」としている。ここでは論説の詳細を省略して要点のみを紹介したい。

橋本進氏は二通のアダムス書簡を紹介し、リーフデ号の航跡（左図）と航海記録（次項表）を作成している。



デ・リーフデ号の航跡

地　名	着	発	航海日数	航走距離	平均速力	停泊日数	備　考
オランダ		6/24	(日) 58	(海里) 2,600	(ノット) 1.9	(日)	毛織物を満載した
サンチャゴ島	8/21	9/15	39	2,500	2.7	25	ヴェルデ岬諸島
ゴンサルヴェス岬	10/24	12/ 2	3	200	2.8	39	(推定)
アンノボン島	12/ 5	12/29	100	5,800	2.4	24	(推定)
マゼラン海峡	4/ 8	8/24	(40)	1,300	1.4	138	マゼラン海峡で越冬
セント・マリア島	11/ 4	11/27	118	9,000	3.2	(55)	チリ海岸を巡航
ウナ・コロンナ島	3/24	—	18	630	1.5	0	小笠原諸島・母島
日本を発見	4/11	—	8	180	0.9	0	種子島東方沖か？
豊　後	4/19						総航海日数 665日
計			384	22,210	2.4	281	航程　22,210海里

(注) 1．ウナ・コロンナ島は「小笠原諸島・母島」と推定した。
　　 2．1海里は現行の 1,852mである。

デ・リーフデ号の航海記録

その中で、赤道を越えてから日本に至るまでの航跡は、書簡に記されたウナ・コロンナ島の特定が避けて通れない重要関門だとして、当時の海図や地球儀を精査して小笠原諸島の母島であることを解明した。

その後、リーフデ号は西へ向かい北緯三十二度で日本の岬を探したが発見できず、四月十一日になって「豊後に近き日本の地を認めた」のである。橋本進氏は北緯三十二度附近の日本は種子島であるとした。そこからリーフデ号は北上して四月十九日に豊後に到着したとする。まさにつじつまの合う推理である。

豊後到着の経緯と到着地

我々はアダムスの二通の書簡の解釈に苦しめられていた。『妻に送った書簡』では「一六〇〇年四月十一日に豊後に近き一地を認め……四月十二日に辛うじて豊後に達した」と記され、『同朋への書簡』には「四月十九日、三十二度半に至りて陸地の影を認めたり」と記されているからである。

そこで、この十一日と十九日は、どちらかが誤記されていると考え、「リーフデ号は北緯三十二度附近で

日本を発見できなかったので、進路を北寄りに向けたところ十一日（あるいは十九日）に到って陸影を発見し、明くる日に豊後に投錨した」と解釈したのである。

その点、橋本進氏の説では、種子島が入ることで十一日～十九日の行程がうまく消化されている。

結論として、橋本進氏はリーフデ号の投錨場所として、臼杵湾・津久見湾・佐伯湾の何れにもその可能性があるとして、「臼杵湾説」と「佐伯湾説」を紹介している。

その中で「シャチヴィ（XATIVAI）はどこか」について、我々は村井先生の指夫（さしふ）説をこう考えなおした。

長崎の宣教師が本国に伝えるのに、豊後国の佐志（さし）生や指夫などの小地名では場所を把握できないのではないかと。おそらく豊後国の臼杵湾や佐伯湾と記すはずである。栃木県佐野市でエラスムス像を発見した丸山瓦全氏が、XATI＝佐伯・VAI＝湾岸と直訳したのが妥当かと思われる。

以上、橋本進先生には感謝申し上げ転載した。

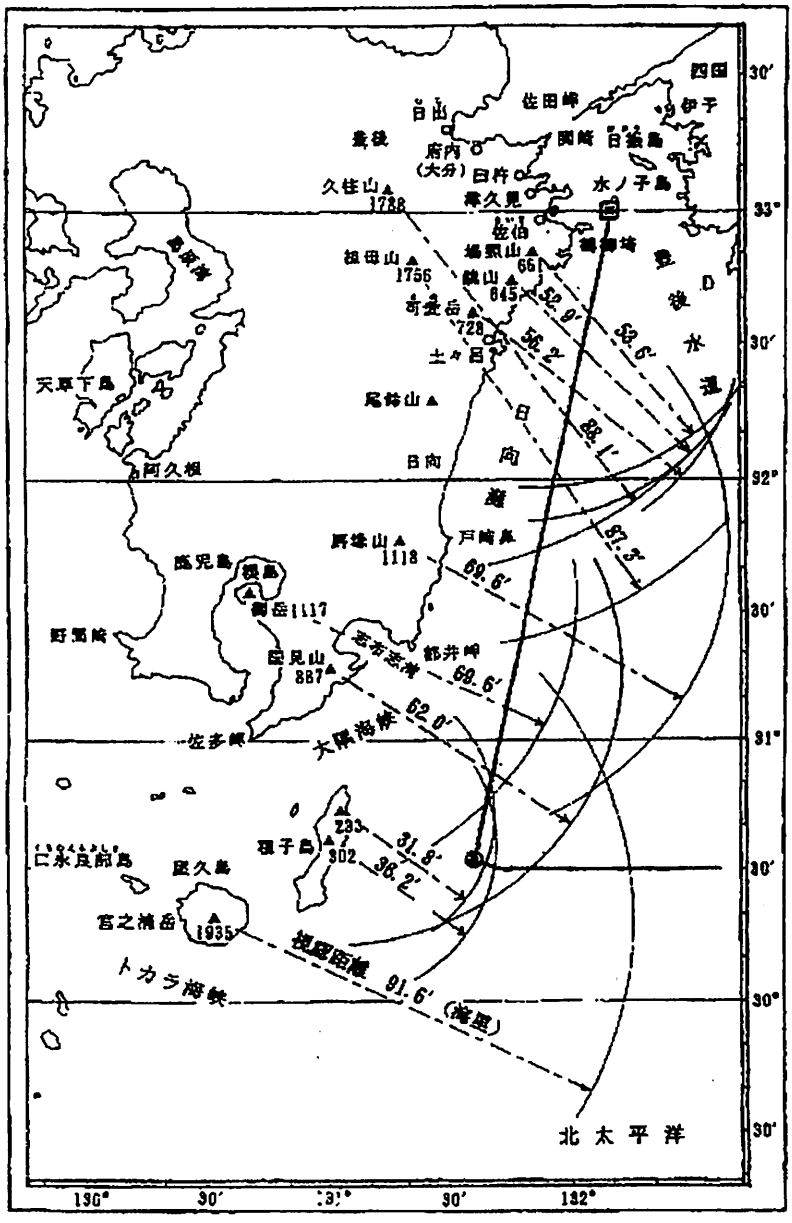
※拝読希望者は事務局にコピーがあります。

一九九〇・四・一一
リーフデ号漂流実験

《参考資料》

この「リーフデ号漂着」については、平成二年（一九九〇）四月一一日及び五月九日の二回にわたって史談会会員村井強氏（故人）等が実践し、その結果を会誌一六一号・一六二号に、「リーフデ号佐伯湾漂着説補遺一、二」リーフデ号航跡検証実験船として報告しています。

本編と合わせて拝読すると良いと思われます。



日本の地を初認した位置